

国際シンポジウム「人間科学と平和教育」 今後の展望

村川治彦
(関西大学)

立命館大学国際平和ミュージアムにおいて行われた国際シンポジウム「人間科学と平和教育」では、2007年以來行ってきた学際的国際研究プロジェクトの研究成果についての報告と、それに対する国内の専門家からの意見をふまえた討議が行われた。臨床心理学者、歴史学者、文化人類学者、哲学者、社会心理学者、市民活動家など様々な立場の方々が発言されたこの国際シンポジウムに参加し、今後このプロジェクトを進めるうえで、いくつかの課題を整理し、それぞれについて焦点を絞った議論を進めていくことの必要性が感じられた。研究か運動かというプロジェクトの性格や、トラウマの世代間連鎖などについては他の報告者の方々が問題提起されているので、ここでは「体験的」アプローチの特徴の明確化と東アジアにおける「謝罪」と「ゆるし」のあり方に絞って考えてみたい。

まず、「体験的」アプローチの特徴の明確化の必要性についてであるが、2011年のレポート（村川 2012a 年）でも書いたように、このプロジェクトは、東アジアの戦争の記憶をどう受け継ぐかという大きな課題に対し、ミンデル夫妻のワールドワークやボルカスが用いるドラマセラピーなど体験的心理学の手法を実践的に応用することで進めてきた。そうした体験的心理学の平和教育への応用については、ロジャースのエンカウンターグループなど米国や英国の人間性心理学における蓄積がすでにあり、このプロジェクトがそれらとどのようにつながるかを整理し、このプロジェクトの共通理解としておく必要がある。

特に、戦争の被害、加害、謝罪、和解など民族や国家など集団の問題に、一人一人が異なる存在であることを前提とする体験的アプローチを応用することによってどのような意義があり、また課題があるかについてはまだきちんと整理できていない。個の体験を重視する体験的心理学の基本的立場を明確にすることで、

客観性、実証性を重視する歴史学や社会学にこうした個人の体験をどのようにつなげていくかについての展望を開いておく必要がある。例えば質的研究法における議論（村川 2012b 年）などを参考にして、個の体験をどのように一般化につなげていくかを明らかにしておくことで、学際的なプロジェクトにおける役割分担や、他領域の知見との統合が可能になるであろう。

次に、東アジア諸国の文化的・宗教的特徴に基づいた和解や謝罪のあり方を明確にすることも重要である。このプロジェクトでは、東アジアの戦争の記憶を扱ううえで、ドイツ人とユダヤ人の和解の試みとして発展してきた HWH の手法を応用している。しかし、そこには当然のことながら歴史的・文化的・地政学的な背景の違いがあり、このプロジェクトにおいて「東アジア型」という呼称を用いるのはそうした背景を考慮する必要を前提にしているからである。

2011 年に南京での HWH に参加した経験をもとに、小田（2012 年）が「謝罪」のあり方と「アイデンティティ」のあり方について探っていく必要を指摘しているが、東アジア型「謝罪」のあり方については、例えば日本政府の謝罪のあり方についてのジャック・デリダとエドガール・モランの議論を手がかりにした森本（2005 年）の考察は興味深い視点を提供してくれる。

モランによれば「戦争へと歩み出さざるを得なかったみずからの状況を説明して理解を求めた」日本政府の謝罪は「自己の内部で完結」しており「相手の存在は二次的な重要性しかもたず、結局は自分で自分のことを残念がっているように聞こえてしまう」（p.277）という。これに対し森本は、和解が謝罪とゆるしについて「関係者双方のかかわりが必要」であることを前提としたうえで、「ゆるしは、ユダヤ・キリスト教の伝統にのみ由来するものではなく、それに依存してもいない。ゆるしを語ることは、デリダの言う『世界ラテン化』の一翼に組み込まれることではない」（p.284）として、精神分析学で有名な「阿闍世コンプレックス」を手がかりに日本的な謝罪とゆるしの構造の特徴を次のように考察している。

森本（2005 年）によればまず、通常の和解のプロセスは「一方が謝罪を差し出し、他方がそれを受けとる。一方がゆるしを求め、他方がそれを与える。」（p.277）これに対し、「自分が悪を行ったにもかかわらずその相手が自分をゆるしている、という事実の認識からくる『申し訳なさ』」が日本の謝罪の背景にあ

り、「日本人の謝罪は、相手にゆるしを求めてそれを相手から受ける、という形式をとらない。なぜなら、ゆるしはすでに与えられているものであって、謝罪はそのすでに与えられているゆるしを発見する手続きの一部にすぎない」(p.281)からだとする。この森本のモデルによれば、「日本的な関係修復の様式ではまず先にゆるしがあり、それに触発されて後から罪悪感が生まれる」が、「実はゆるしはそこで完結しない。先行する仮のゆるしは、相手がそれによって罪悪感をひしひしと感じている、ということを確認した時点で、はじめて本来のゆるしとなる」(p.283)のである。

このモデルが謝罪・ゆるしの日本的な構造としての的を得ているか、さらには東アジア的文脈のなかでそれが機能するかどうかは、慎重に検討されなければならない。しかし、幸存者夏淑琴さんへの暴言や、張連紅(2012年)が報告している南京大虐殺の記憶の3つの段階は、この日本的「ゆるし」と「謝罪」の構造からみると本来のゆるしへの道からまったく逸脱していることは明らかであろう。その一方で、中帰連や今回のシンポジウムに参加された紫金草合唱団の活動などは、この森本が提示した日本的謝罪のあり方の一つの実践例と理解できる。

体験的心理学をベースとする東アジア型 HWH プログラムは、それ自体が特定の謝罪やゆるしの様式を前提とした和解のモデルを提供するというよりは、そうした独自の謝罪やゆるしに基づく「和解」のあり方を実践的な体験によって探っていく「場」を提供することを目的とする。体験内容(例えば、過去の歴史に罪悪感を抱くとか、あるいは怒りを感じるとか)をあらかじめ前提とするのではなく、エクササイズを通して参加者自らが実感として体験することを手がかりに、そうした謝罪やゆるしのあり方を探っていく、そうした方向性が体験的アプローチの特徴であり、その意義であると考えられる。これからのプロジェクトにおいては、ボルカスの HWH プログラムで設定されている和解のためのステップやエクササイズを、参加した人々がどのような体験をしたか、特にそこで感じた違和感や疎外感、不満などによって吟味し、異なるエクササイズのあり方を創造していかなければならない。そのために、例えば森本が提示した日本型「ゆるし」と「謝罪」の構造に基づく、エクササイズを考案し、それを日本や東アジア諸国の人々が体験してみることも有意義だと考える。

いずれにしろ、「東アジア型」歴史・平和教育プログラムを開発するというこのプロジェクトにおいては、こうした東アジアの謝罪とゆるしの独自のあり方を考察することは、不可欠である。国民国家の枠に縛られず東アジアの戦争を経験した世代と戦後世代が協働で、これからの共生関係を築いていくために、どのような「ゆるし」や「謝罪」が必要であるかを探ることをこのプログラムでは目指していきたい。

【引用文献】

- 村川治彦 (2012a) 一人称から歩み直す『戦争体験』～体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて 「共同対人援助モデル研究 3」 pp.94-105
- 村川治彦 (2012b) 経験を記述するための言語と論理—身体論からみた質的研究「看護研究 第45巻第4号」 pp.324-326
- 森本あんり (2005) 「共生」と「和解」に向けて—「ゆるしの作法」の比較宗教的考察 (村上陽一郎・千葉真 編) 「平和と和解のグランドデザイン—東アジアにおける共生を求めて」 風行社 pp.261-288
- 小田博志 (2012) 南京と『和解』—歴史の深淵に橋をかける「共同対人援助モデル研究 3」 pp.70-85
- 張連紅 (2012) 南京を思い起こす: 負の遺産を共有財産へ「共同対人援助モデル研究 3」 pp.14-20